人間の娯楽にチンパンジーを利用することの何が問題か

松阪崇久（大阪成蹊大学教育学部）・徳山奈帆子（京都大学霊長類研究所）

▲母親にくすぐられて笑顔をみせるチンパンジー（*Pan troglodytes*）の乳児。

▲母親との遊びで笑顔をみせるボノボ（*Pan paniscus*）の乳児。

動物に対する人々の意識や扱い方は、時代と共に変化する。たとえば、かつてはチンパンジーに服を着せて動物ショーやテレビに出演させる動物園が国内にも複数あったが、動物福祉や保全の観点から不適切だと考えられるようになり、今ではほとんどなくなった。では、そのようなチンパンジーの扱いの何が問題なのだろうか？

動物福祉の観点からはまず、ショーやテレビでの利用が母子分離を引き起こすことが問題になる。チンパンジーが人間の娯楽に利用されるのは、かわいらしくて人がコントロール可能な幼少期である。本来の野生の状態ではいつも母親と一緒で、授乳、運搬、毛づくろい、遊びといった養育を受ける時期だ（近縁種のボノボも同様）。しかし、母親が抱いている子をショーの時だけ離して使用するのは難しい。そのため、母子を完全に分離してしまうことになるのだ。母親から離された子は人間に依存するようになり、調教もしやすくなる。

幼少期は、群れの仲間たちと遊びやケンカなどのさまざまな関わりをもち、チンパンジーとしての社会性を身に着けていく時期でもある。人の手で育てられると、母親や群れの仲間との豊かな社会的経験の機会が失われ、社会行動が正常に発達しなくなることが知られている。交尾や育児、「挨拶」などができなくなり、群れでの生活が難しくなるのだ。9才頃（若者期）になるとチンパンジーは力がとても強くなり、人間と共に生活することも難しくなる。この頃にショーも引退することになるが、その後の数十年の長い余生を、人間ともチンパンジーとも親しく関われない寂しい状況で過ごすことになる。このような問題を避けるため、現在、多くの動物園で母親による育児が原則とされ、育児放棄された場合にも子どもの早期群れ加入への支援がおこなわれている。

チンパンジーが受けるストレスも問題になる。ショーやテレビのチンパンジーは、かわいらしさやユーモラスなしぐさで人間を楽しませてくれるが、そのような映像を詳しく分析したところ、チンパンジーはしばしば恐怖や不安の表情をみせていることがわかった（松阪 2018、笑い学研究 第 25 号）。長時間のショーや撮影ロケで自由を奪われることや、芸を調教される際のストレスも問題になるだろう。

▲コドモ同士で遊ぶボノボたち。

絶滅危惧種であるチンパンジーの保全の観点からも問題が指摘されている。「ショーなどでの使用はチンパンジーへの親近感を促し、保全に対する意識を高める」という意見があるが、これを否定する実験結果が得られている。

アメリカの研究者・ロスらは、チンパンジーの写真を加工・合成し、「森の中」「動物園の運動場」「人の居住空間（オフィス）」という背景の中で、チンパンジーが「一頭でいる」または「近くに人がいる」という画像を作成した。この中の一枚を被験者に見せた後に「チンパンジーは絶滅危惧種か」という質問をしたところ、近くに人がいる画像を見た被験者は、チンパンジーだけの画像を見た被験者よりも、「絶滅危惧種ではない」と答える割合が高かった。また、背景がオフィスだった場合には、森の中や動物園だった場合よりも「絶滅危惧種ではない」と答える割合が高かった。つまり、チンパンジーが人に抱かれたり、人が住む環境にいたりする様子を見ると、チンパンジーは保護すべき存在だという認識がもちにくくなるのだ。

▲チンパンジーの恐怖の表情（グリマス）。

最近ではさらに、チンパンジーに限らず希少動物の保全を考えるならば、どんな意図があったとしても、人と触れ合っている写真や動画の公開は避けるべきだという議論もおこなわれている。メディアやインターネットからの情報が人々の行動に与える影響が大きくなる中で、研究者や動物飼育員、ペット所有者など、希少動物と関わるすべての人の意識と行動が問われるようになっている。

松阪 崇久
まつさか たかひさ

大阪成蹊大学教育学部・准教授。タンザニアのマハレ山塊国立公園にてチンパンジーの調査をおこない、ヒトとの比較により遊びと笑いの発達及び進化について研究している。また、ヒトの子どもの遊びと大人による援助の在り方について研究している。

徳山 奈帆子
とくやま なほこ

京都大学霊長類研究所国際先端共同研究センター・助教。2011 年よりコンゴ民主共和国のルオー学術保護区（ワンバ）にてボノボ、2016 年よりウガンダ共和国のカリンズ森林で野生チンパンジーの行動観察研究をおこなっている。主な研究テーマはボノボのメスの社会絆と社会的地位についてや、集団間の社会関係について。